

第10回ヒーローズカップの全ての大会で、キャプテンを中心に選手の主体性を促すため、**ベンチ及び観覧席からの指示は一切禁止**とさせていただきます。

ラグビーは本来、試合中の判断はゲームキャプテンが行います。監督・コーチは観客席から今まで教えてきたことを発揮してくれるであろうと信じながらゲームを見届けます。それは決してトップリーガーや大学生だけではなく、小学生でもグラウンドにいざ立てば責任をもって判断し、プレーしてくれるはずです。

大人が信じてあげましょう。

『子どもたちの可能性を』『子どもたちのひらめきを』

ヒーローズカップは子どもたちの【主体性】を応援します。

今回、ヒーローズカップの規約・レフリーガイドを定めるにあたって、出来る限り安全で公平であることを念頭において作成しました。ミニラグビーのレベルが上がるにつれて子どもたちのディシプリンも高くなり、ルールを守ることの尊さを知って、ルールがラグビー憲章という法の精神から出来ていると感じていると思います。ラグビー憲章の重要な精神は、プレーをすることの楽しさ、ゲームを観ることの面白さを尊重するものです。それは選手の自主的なプレー選択や、ルールを守るディシプリン、相手へのリスペクトによって成立します。指導者の方々には、公平で平等にゲームをする機会を得た選手達の自主性を尊重し、選手が存分に楽しむことを温かく見守って頂きたいと思います。レフリー・競技委員をはじめ、私たち大会役員全員は、選手が思う存分プレーを楽しんで、指導者・保護者の方々が観て喜び、全ての人が心から感動する大会になってほしいと願っております。

ヒーローズカップ競技委員長 矢木 眞也

タッチライン際の大人たちへ

ラグビーは試合になれば選手がすべてを判断してプレーするスポーツです。だからこそ、教育的価値が高いと認められているのです。コーチの仕事は選手が自分達で判断してプレーできるように育て、導くこと。親や観戦者はそれを温かく見守る。それがラグビーです。近年、ラグビー王国ニュージーランドですら、子どもたちの試合での野次や罵声が問題になっています。現状を憂い、「Let Kids Be Kids」というキャンペーンが行われています。子どもは子どもでいさせてあげてほしい。ミスを叱り、レフリーに文句を言うのではなく、その奮闘をサポートし、楽しい思い出を残してあげてほしい。そんな願いが込められています。子どもたちはボールを持って走り、パスし、タックルすることが楽しくて仕方がないのです。仲間と協力して戦い、試合が終われば相手チームと友達になる。それは美しい思い出になります。その記憶の中に、ひどい言葉を刻みつけしないでください。子どもたちは大人の態度を見えています。子どもたちの自主性を重んじ、レフリー、相手チーム、両チームのサポーター、すべてをリスペクトしながら、子どもたちをサポートしてください。それがラグビー精神なのですから。

ラグビージャーナリスト 村上 晃一 氏



京都府立鴨沂高校→大阪体育大学。現役時代のポジションは、CTB/FB。86年度、西日本学生代表として東西対抗に出場。87年4月ベースボール・マガジン社入社、ラグビーマガジン編集部勤務。90年6月より97年2月まで同誌編集長。出版局を経て98年6月退社し、フリーランスの編集者、記者として活動。